

美馬市木屋平森遠地区と 『村落構造の研究』をめぐって

民俗班 (徳島民俗学会)

磯本 宏紀*

要旨：旧木屋平村森遠地区を主なフィールドとして調査され、法社会学の立場から書かれた『村落構造の研究』(磯田, 1955) という学術書がある。戦後の「農村共同調査」の先駆けともいえる調査として評価され、「村落構造論」の研究史としても避けて通れない重要な位置づけを与えられている。しかし、一方でこの本の刊行を契機に、その記述により地元森遠地区をはじめとする木屋平においては厳しく批判され、ある事件を引き起こすことになる。記述する側、記述される側という双方の立場の相違と認識のズレから生じたこの問題の概要について、この機会に整理した。

キーワード：『村落構造の研究』, 青年組織, 性的純潔観念, 森遠地区

1. 『村落構造の研究』の概要

『村落構造の研究』(磯田, 1955) は、磯田進氏らを中心として、東京大学社会科学研究所による「コミュニティ研究」の一環をなすものとして、文部省科学研究費の補助を受けて行われた研究である。この調査に参加したのは、歴史学、農業経済学、法社会学、政治学等の専門分野の異なる研究者であり、調査は1952(昭和27)年12月はじめに約10日間にわたって行われた。その調査協力者には、当時の木屋平村長名や「村役場の各位ならびに村民の皆様方」、徳島県庁及び教育委員会があげられるほか、当時の徳島県立図書館長や同館員の名前も記され、とくに調査地選定等に当たっての支援を同館が行っている。

本書は「まえがき—徳島県と木屋平村の概況」「第一章 歴史的背景」「第二章 村落社会の構造」「第三章 政治的支配の構造」という3章だてで構成されている。比較的広範な専門分野から分担執筆されているため、部分部分はさまざまな視点から読

むことができるが、全体としては農村社会における支配構造ないし秩序を「村落構造」として把握しようとした研究である。

本書については、戦後の「農村共同調査」のさきがけとしての調査方法と、「村落構造論」の研究史上欠かすことのできない研究書としての評価が定着していると考えられる。

そのうち「村落構造論」としてとくに注目されるのが、「無家格制」という用語について本格的に論じ、日本村落を「家格制」と「無家格制」の二分類で大別できるとした類型を提出した点である。これは、同時代の福武直(1951)によって提示された東北地方など東日本に多く見られる「同族結合」と、西南日本に多く見られる「講組結合」の日本村落の二分類定義とも類似するものでもあった。すなわち、本書の分担執筆者の一人江守五夫氏によれば、

「家族共同体は封鎖的な集団として存在し得ず、家族諸成員は、各々その性別と年輩に応じて

* 徳島県立博物館

個々ばらばらに、強い凝集力を以て結ばれた村落の性的・年齢的分業集団に加入し、直接に村落的社会統制に服する」

として「無家格型」の村落を定義する(磯田, 1955: 197頁)。この対概念としての「家格型」村落は、

「家族共同体は極めて封鎖的な集団としておのこの独立し、家長は、家族共同体における唯一の主体者として現われ、対内的には家族共同体に属するすべての人員と財産を所有支配し、対外的には家族共同体を代表する唯一の存在となる」

として定義した(磯田, 1955: 197頁)。

さらにこの二分法の論拠の一つを、家父長制以前を想定して「青年組織」と「婚姻慣行」に求めている。調査結果として、家原理とは別の原理で結合する青年組織や、自由恋愛の諸慣行を含む婚姻慣行について記述されている。

以上のような結論を得るためには、調査対象(モデルケース)の抽出作業も重要な作業の一つであろう。調査地を森遠地区とした理由として、本書では「村落構造の旧時におけるいわば『原型』が比較的くずれないで残っていると予想される」ことと、「多くの人(筆者注: 研究参加者)が従来、四国の農村を手がけた経験をもたなかったところから、一度四国の村を調べて見たいという希望」(磯田, 1955: 2頁)により選択されたとしている。あらかじめ設定された理論を立証するのに好都合なために、森遠地区は調査対象として選択されたのであった。

2. 『村落構造の研究』出版と紹介記事をめぐって

磯田進氏を中心とする東京大学社会科学研究所による調査は、旧木屋平村に宿をおいて主に森遠地区で聞き取り調査を行った。この調査時1952(昭和27)年12月時点では、地元木屋平においても多くの協力者を得て好意的に受け入れられていたようである。

そんな中で、調査成果が1955(昭和30)年12月に『村落構造の研究』として刊行され、1956(昭和31)年2月18日(土)の『徳島新聞』には「うき彫り木屋平村 磯田東大教授の調査結果」という紹介記事が掲

載された。これには「新普請は総出で」「欠けている純潔観念」との見出しがつけられ、この報告書で扱われた「普請組」「村民の純潔観念」「村議会議員選挙」の3つのテーマに限ってその要点が紹介された。このうち、後に問題とされたのが、「村民の純潔観念」に関する以下の箇所であった(徳島新聞社, 1956)。

「木屋平村民の間では夫婦間以外の性的交渉は普通に行われて、性的な純潔観念がかなり欠如している。事実上成熟した男女間で童貞とか処女を保とうとする者がいないことは容易に想像され『この辺で結婚前の娘はたいてい関係があるのか』との間に対して『そりゃいうまでもない』との返事すら聞かれた。この現象を裏付けるように非嫡出子(婚姻外の子)が非常に多く、村民は『生まれる子供の大体一割ぐらゐはいるでしょう』と語っている」

この記事では、『村落構造の研究』を一部引用する形で紹介されているものの、本論に関する言及がないまま事例を紹介するにとどまっている。実際、記事については『木屋平村史』においても以下のように言及されている(三木, 1971: 1019頁)。

『『村落構造の研究』が出版されてからまるで木屋平は性的無秩序の村であるかのごとく、新島新聞に興味本位に書かれたもので、村の青年団や婦人会を中心として全村民が事実無根のことだと新聞社へ抗議をしてその釈明に社員を呼んで集会をもった。昭和26年のことである」

「欠けている純潔観念」(徳島新聞, 1956)あるいは「性的純潔観念の欠如」(磯田, 1955)という記述が、地元木屋平において問題視されたようである。

3. 『村落構造の研究』をめぐる木屋平での対応

1955(昭和30)年頃の木屋平では、青年団による活動がさかんだった。青年団については、阿波学会調査時に聞き取り調査を行った。調査時には、以下の内容の聞き取りをした。

かつては若連組ともよばれる組織であり、またアジア太平洋戦時には、軍事教練を行う組織になって

いた。中学校卒業時の15歳より入団し、結婚を機に退団することが多かったといい、かつての強固な組織とは異なる緩やかな組織へと変貌していたようである¹⁾。そのため、強制的にはなく、「名誉なこと」として各自が希望して入団していた。青年団における青年の評価は、仕事への勤勉さ、博打をしない、酒癖が悪くない、喧嘩をしないなどという点で「できがいい人」として評価されたという。なかには、この品行方正ともいえる態度から逸脱するとされ、退団させられる者もあったという。

青年団において、連れだって講演会に参加したり、夜学などの勉強会を開いたりしたこともあったという。そして、当時の青年団の活動が日常的に行われる中で、『村落構造の研究』が出版され、『徳島新聞』紙上で掲載された一連の流れについて話合いがもたれ、婚姻慣行に関する記述をめぐって「欠けている純潔観念」に関する記述について抗議したという。そこで、先述の三木（1971）の記述のとおり記事を掲載した徳島新聞社に対しての抗議を行った。こうした風潮、価値観の下において、「欠如している純潔観念」という表記自体が抗議の対象となったとも考えられる。さらには、それが興味本位ともとれる新聞記事により一般に広く知られるようになった。この記事と、しばらくの間のその波及効果を、当時多くの青年団構成員が「恥ずべきこと」「けしからんこと」と認識したと考えられる。

ただし、『村落構造の研究』において調査時現在の婚姻形態を把握していなかったかという点、必ずしもそうではなかった。たとえば、明治25年生まれの男性からの聞き取りによる事例が紹介されている（磯田，1955：142頁）。

「本人どうしが好き合って結婚になる例は、昔は十中二、三くらいのもだったろう。本人が好いたら、双方の親も強いてこれを押しやぶるわけにはいかないから、自然、承認するだろう。しかし、本来は、親が言い出したように結婚するのがよいと考えられていた」

通婚関係においても超世代的な「家格」が最優先にされないとして、村落構造として「無家格型」に位置づけることができる論拠としている。一方、こ

れからわかるのは、『木屋平村史』などと同様に当時の「自由恋愛」は少数であったことを読み取ることができる。

こうしてみると、『村落構造の研究』は、現状を把握しておきながら、なおも誤解を生んでいたといえよう。それは、その記述における時間軸が明示されていないからであり、過去の事象について変遷としてではなく、現象としての記述に終始している点である。また、理論の抽出を目的としたため、それに好都合な事例の提示に重きがおかれていた。そのため、断片的な読者に誤解を与えたと考えられる。その顕著な誤読が、先の『徳島新聞』の記事であった。

4. 『木屋平村史』における『村落構造の研究』に関する記述

先に引用した箇所のほかにも、三木（1971）において磯田（1955）の報告が多数引用されている。たとえば、「青年団」（三木，1971：861～864頁）や「婚姻」（三木，1971：1107～1111頁）などで大幅に引用されている箇所をみることができる。ただし、『村落構造の研究』を評価しながらも、

「東大の研究資料の一部を引用してみたが、もちろんこのような事実はあってもそれから引き出した結論がこの研究の通りだとはいえない。村外の人、特に専門の学者が調査したものにこんなものもあるということを書いたのである」

とする（三木，1971：1109頁）。

そうした前提にたつて、磯田（1955）の「婚姻慣行」の部分について、「要約すると性的な純潔観念が欠如しているという」²⁾とする「トリアイ婚」「ヨバイ」「ボボイチ」「カタグ」等の事象については、

「この調査は木屋平村以外の近隣の町村でもおそらくこんなものになるであろうと推定されるが、昭和30年以降の村内でのこれらの性的な考^(ママ)う方は、ずっと清純であって現在の若者にとっては夢物語りであろう」

とした（三木，1971：1108頁）。『村落構造の研究』の記述によって、またそれを紹介した『徳島新聞』の記事によって、誤記ないし誤解されている部分へ

の指摘とも受け取れる。すなわち、実際こうした過去の婚姻慣行は旧木屋平村の近隣地域にも広くみられ³⁾、「木屋平の特色」というわけでもなかったのである。

もちろん、『村落構造の研究』においても、近隣地域との比較と地域の相対化を目指した議論が積極的に展開されたわけではない。ただし、その調査当時のことではなく、過去に対する聞き取り調査による資料のみを掲載し、村落構造論における類型化を目的としたモデルケースとしての調査であり、地域の特質を明らかにしようとしたものではなかった。そうした点で、地域の文脈からは読み取りにくいものとなったと考えられる。

1996（平成8）年に刊行された『改訂木屋平村史』においては、「婚姻」の項目の冒頭で以下の記述がされている（木屋平村史編集委員会、1996：989頁）。

「本村における結婚は、明治・大正時代ころは見合い結婚がほとんどで、恋愛結婚を罪悪視する傾向が強かった」

改めて、単文ではあるが「明治・大正時代ころ」のおおかたの傾向を確認している。

5. おわりに

本稿では、『村落構造の研究』における調査とそれを受けた『徳島新聞』の記事、青年団等の活動から『木屋平村史』に至るまでの一連の議論の概要を整理してみた。木屋平などの地域社会における儒教的思想の浸透や教育勸語的理念の扶植により、規律ある「性的純潔観念」が、当時の各青年組織の活動がこの抗議運動の原動力ともなった。しかし、その具体的な議論内容と背景については、本稿においては十分に踏み込んだ報告をすることができなかった。また、本稿で紹介した村史等の各記事には、家父長制的価値観なり、青年団活動等における規則や倫理観なり、それぞれの立場における価値観にもとづいて記述されたと考えられる箇所も散見できる。「客観的」を意識して書かれたものであるにもかかわらずである。こうした思想的背景に関する資料の提示は、紙幅の都合もあり本稿においては至らなかった。したがって、これらについては今後の課

題として検討し、別の機会に整理する必要がある。

「調査というものは地元のためにはならないで、かえって中央の力を少しずつ強めていく作用をしている場合が多く、しかも地元民の人のよさを利用して略奪するものが意外なほど多い」（宮本、1986：129頁）

この宮本の記述は1972（昭和47）年時点のものである。阿波学会などさまざまな調査の末席に加わりながら、筆者自身、自省するところでもある。



注

- 1) 明治以前から昭和戦前期の青年組織については、磯田（1955）、三木（1971）において詳細な記述がある。
- 2) この「欠如」という語意をめぐって、双方の評価基準のちがいが異なるイメージで解釈されていると考えられる。
- 3) 岡田（1976）、岡田（1978）などですでに報告されている。

文 献

- 磯田進編（1955）：『村落構造の研究』東京大学出版会。
- 岡田一郎（1976）：神山町周辺の婚姻習俗，郷土研究発表会紀要，22，129～134頁。
- 岡田一郎（1978）：山城町の婚姻習俗，郷土研究発表会紀要，24，159～166頁。
- 木屋平村史編集委員会編（1996）：『改訂木屋平村史』木屋平村。
- 徳島新聞社編（1956）：うき彫り木屋平村 磯田東大助教授の調査結果，『徳島新聞』，昭和31年2月18日（土），徳島新聞社。
- 福武直（1951）：『日本農村の社会的性格』東京大学出版会。
- 三木寛人編（1971）：『木屋平村史』木屋平村。
- 宮本常一（1986）：調査地被害，『宮本常一著作集 31旅にまなぶ』，未来社，109～131頁（初出は1972年発行の『探検と冒険・七』朝日新聞社）。